

アンソロジー
anthology

ね む
合 歡

Vol. 9



2012 夏

目次

巡る季節に……………	浅野純子……………	2
虚空……………	石井宏幸……………	4
春風……………	井上悦男……………	6
春……………	植田桂之……………	8
旅に拾ふ・春(一) ……………	梅田光憲……………	10
つつましやかに……………	大戸稔……………	12
緑射す……………	金尾一志……………	14
いのち 三……………	小六誠一郎……………	16
西行庵……………	桜本滋子……………	18
初夏……………	角南房子……………	20
日常の……………	高城登代……………	22
青き踏む……………	谷口利子……………	24
四国不動を巡る旅……………	津崎敬恵……………	26
句帳より……………	富阪宏己……………	28
路地……………	長尾京子……………	30
ド・ミ・ソ……………	名木田純子……………	32
をかたまの花……………	信里由美子……………	34
径……………	蓮岡健美……………	36
沙羅の花……………	三宅進……………	38
地図……………	山下祐子……………	40
俳句と一年……………	與田武彦……………	42
正座……………	米元ひとみ……………	44
大橋あたり……………	渡辺牛二……………	46
~~~~~		
何事も無かったように ……………	富阪宏己……………	48
私の好きな一句……………	信里由美子……………	55
「倉敷」……………	石井宏幸……………	57
編集後記……………	渡辺牛二……………	58

## 巡る季節に

浅野純子

子の思ひ親の思ひや花八つ手

寒風を縫ふが如くに草はべり

寒椿赤紅つけてお出ましか

ヒヤシンス小さな命ムクムクと

色褪せし椿に雨が時を告げ

チューリップひしめきあつて空仰ぎ

桜道黄色いかばんぞろぞろと

新緑の初々しさに見とれをり

若緑衿を正して通り過ぎ

憲法記念日太公望に徹しけり

# 虚空

石井宏幸

人声の落ちくるばかり蟻地獄

万緑へ巻き上げられてゆくリフト

鳴き代はる時鳴き急ぎ法師蝉

遠く鳴く秋の蝉とは風に棲む

鳥威風を威してをりにけり

早紅葉の今日が繋いでゐる昨日

紅葉散るこゑかもしれず風の中

陰を掃く音に底冷ありにけり

行く雲はかがよひ鶴は詩を紡ぐ

百幹の虚空へ傾ぎゐる寒さ

# 春風

井上悦男

三つてふ指たたぬ子に春来たる

幼子の声跳ね返る春障子

幼子に始めての靴春の風

春風と母を追ひ越す一輪車

風船に大きすぎたる青い空

大声で駆け行く子等や新樹光

緑蔭に母を置き去り三輪車

かたぐるまどくところのさくらんぼ

二階より百の夢舞ふしやぼん玉

にぎやかに去りて玄関春の泥

# 春

植田桂之

口遊む昭和のメロデー温め酒

椋鳥の群向きを変へ形変へ

薄氷の揺らげば空の揺らぎけり

春障子目につく棧の埃かな

木洩日のあたる一ヶ所藪椿

一夜さの風に落ちたる椿かな

瑠璃色の野面の光犬ふぐり

干拓地菜の花の風吹き渡る

遍路ゆく流るる雲を道連れに

母の日や妣の口癖妣恋し

旅に拾ふ…春（一）

梅田光憲

湯治場の捨て湯まじりの雪解川  
俯瞰して芙美子の好きな春の海  
目刺干す風藍色に匂ふまで  
のどけしや盥頭に行商女

春日傘芙美子の路地を返り来ず  
渡月橋渡り終えたる花吹雪  
眺望の花菜の上の薩摩富士  
石室の飛鳥の匂ふ春の雨  
楼蘭の砂かも知れぬ黄沙拭く  
飯蛸の飯真二ツに幕の内

つつましやかに

大戸 稔

剪定の齒切れ佳き音塔にまで

研して山駈けくだる田植水

雷入れて娘より見舞の長電話

蝸や妻のこの頃食細く

秋祭酔ひて昭和を恋しがる

タービンの遠音伝へてダムの秋

稲刈の果てし吉備路の風の音

百連の干柿仰ぐ宿場町

妻病みて砂かむ如し寒の飯

美作の人雪焼けて句座にあり



# 緑射す

金尾一志

稚児抱く君の胸乳に緑射す

緑射す見上げし君の瞳にも

乳のみ子の掌が攔まむと若葉影

新たなる仕事の道や若葉風

職を得て再び歩み出す若葉

夜の若葉梢が風としやべりだす

少年の翳は遠し栗の花

片虹や何か言ひ残してないか

田植機に取り残されし轍かな

髪を解き放てば風や緑射す

いのち 三 小六誠一郎

告知受け秋霖の夜に妻送る

菊括る妻の背に黙ありにけり

冬霧の生る暁の暗さより

名を知らぬまま満天の冬星座

春待つや子牛に大き耳標つけ

春光を耕してゐる農夫かな

ムンムンと馬酔木は命垂らしをり

鶯の一閃水面震はする

看病の夜の刻々と浅き夏

おとろへるものも新樹の光るなか

## 西行庵

桜本滋子

寒波来る予報に膨れ旅鞆

冬の虹くぐりて旅の始りぬ

憧れの西行庵や冬紅葉

麓より霧の湧き来る隠れ塔

み吉野の時雨又来る隠れ塔

み吉野の溪へ紅葉の乱れ散る

茶の花や溪底踏みて如意輪寺

修復のまだ間に合はず神還

紅葉散る錐揉みしつつ舞ひにけり

み吉野の瀬音離れぬ落葉道

# 初夏

角南房子

庭めぐるひと芽ひと芽に日脚伸ぶ

野も山も人も春待つ色となる

読みさしの又読み返す春炬燵

一湾の春日をためて眠りけり

莖立も束ね売らるる道の駅

永き夜の振り子時計のあくびかな

家訓なほ生きて憲法記念の日

展望塔ひとめぐりして初夏に会ふ

干拓の地に始まりし麦の秋

浦町はどこもよく似て初夏の路地

## 日常の

高城登代

紫陽花の額より滴折ればなほ

梅雨明けやパンにサラダにコーヒーに

雲湧きて摂氏三十五度の夏

風鈴のかたづけられる通夜の席

庭師等の蚊遣の煙日暮まで

暮れて来て手桶のままの藤袴

虫の名の謂れを聞くも妙ならむ

秋の暮訃音に向かふ旅仕度

秋日落つ鍬打つリズム止りたる

短日のサイレンの音遠く澄む

## 青き踏む

谷口利子

踏青の歩を返すとき波の音

愚痴聞いて愚痴の言へざる桜餅

青空は無垢のカンバス梅の花

梅一枝いつ客来てもよきやうに

冬の日のまはり込みたる野の起伏

着ぶくれて反骨の影失せにけり

鴟高音さくさく鋏を使ふとき

語り部に昼を灯してちちろ鳴く

遠ざかるもの美しき鱗雲

灯下親ししみじみ人の句を読みて

四国不動を巡る旅 津崎敬恵

先づ障子洗ひ遍路の旅仕度

早発の遍路に配る蓬餅

露のまだ残る寺より打ち始む

八ヶ寺を打ち終へ梅の雨となる

岩窟に草履一足董咲く

忌心に訪ふ廃寺跡昼の虫

お不動の縁に杖おき春惜しむ

花の寺椎茸干して過疎を守る

膝よせて余寒の寺に法話聞く

一ヶ寺を残し師走の灯に戻る

## 句帳より

富阪宏己

チエ口聴きに急ぐ師走の風の中

一年を演じきつたる枯木かな

掃くほどにだんだん寒き庭となる

恵方へと路上は白く輝きて

餅花を眠らせてゐる子守唄

屋上に上つてみても冬ぬくし

風止みしとき底冷のありそめし

灯さるるものの凍てゆく夜なりけり

薄氷の池一枚の日向かな

街路樹のうひうひしさも二月かな



## 路地

長尾京子

縮む髭もて余したるかまど猫

かまど猫ぶちの姿となりにけり

大寒や猫の尻尾の垂るるなり

手火鉢の湯音聞きたる膝の猫

梅雨晴間猫と烏のにらめつこ

路地の風山から海へ葉月かな

虫時雨風抜くる路地ありにけり

鳴いて止むまた鳴いて止む虫の声

戯るるやんちや猫ある文化の日

家猫と小春なかよく屋根の上

ド・ミ・ソ

名木田純子

三線の音の躰き椿落つ

山川の瀬音に吞まれ流し雛

うぐひすの正調くづす山の風

讚美歌をうたふ横顔卒業す

宿の灯を消して河鹿の声に向く

街騒を水に沈めて未草

風音の水音となり秋涼し

教会の朝のチャイムや白芙蓉

山国の空へ踊の下駄の音

闇の戸を小さくノック鉦叩

# をがたまの花

信里由美子

草笛を吹き葛城の嶺々蒼し

水音の谿の朧を抜けて来し

花の雨眦美しき飛鳥仏

昼しづか蝶の刻める蝶の刻

をがたまの花零れつぐ薄暑かな

檜若葉千年の風引き寄せて

頬に受く生れしばかりの若葉風

松蟬の風は水辺へ水辺へと

夏蝶の風濃き方へ飛びゆけり

椎の香の遠くを近くしてをりぬ

# 径

蓮岡健美

枯葉除け如意輪観音確かむる

手袋のままに合掌山祠

腹割れば俄に縮む海鼠かな

朝靄の深き山路の初音かな

福寿草しやがみて愛づる高さかな

寒滝行濡れたる草鞋並べあり

叔母の忌や立春吉日晴れ渡る

岩床を光り流るる春の水

吊橋の底に浮きたる山桜

見はるかす大山蒜山五月晴

# 沙羅の花

三宅 進

街角に赤い羽根持つ女の子

木の葉道孫の手をとり宮参り

琴の友迎へて楽し妻の夏

古戦場弔ふが如夏椿

沙羅の花静けさの中香りけり

懐かしき友とひととき語る夏

雷鳴に目覚させらる朝まだき

この年も朱色のバラの蕾つけ

我が庭に彩どり加へ日照草

紫陽花が日毎見る目を樂します

## 地図

山下祐子

元旦の身のたけほどの誓ひかな  
花つけてそれと分かりし犬ふぐり  
近すぎず遠すぎもせず内裏雛  
その時を定めぬ如く椿落つ

凧うなり天へ天へと焦がれ行く  
げんげ田は幼き我の秘密基地  
ワイシャツの白の固さや新社員  
虫の音に歩みも緩む烏城道  
古の秋もかくなむ後樂園  
くたびれし地図も友なり秋遍路

# 俳句と一年

與田武彦

赤い花誉めてやりたや牡丹咲く

百合植ゑて待ち遠しこと花の顔

瀬戸の橋明日の希望や虹の橋

秋高し名園に子ら飛び回る

立冬や皇帝ダリア空に咲く

瀬戸の冬夕日の帯を身にまとひ

日向ぼこ仲良くすわり猫二匹

恵方巻き海苔を主役に作るかな

空高く嵐に負けぬミモザかな

空と海パラグライダーや五月来る

## 正座

米元ひとみ

家あれば土蔵ありけり青田風

水音を秘め十葉の花ざかり

白玉や人ごゑといふ静けさに

母にまだ小さな仕事白木椽

黄金虫夜へ返してやりにけり

立待の月にみじかし宿浴衣

松茸に土瓶の無骨よかりけり

虫の音のまさりゆくなり夜の雨

秋灯や雨ののこれる石畳

夜寒なりついつい正座してしまふ



# 大橋あたり

渡辺牛二

川沿に行けばきりなき花筏

川底をつつく大鯉のどけしや

とびとびの石の渡れと春の川

花屑の流れ来し方人の波

残り鴨人に構はず羽つくるひ

川渡る風に道ありつばくらめ

風出でし川に下げたる鯉幟

異国語の混じる城山花の下

花吹雪カメラ出す間のなかりけり

けむり立つ城の裏側花は葉に

## 何事も無かったように

富阪 宏己

二〇一一年三月一日を知らない人はいないだろう。くる日もくる日も、テレビで、新聞で報じられてきた日だから。

二〇一一年は私にとって、入院中の息子に加え、家内も入院を繰り返して、およそ旅なぞ出来る年ではなかった。

でも東北の、三陸海岸へ飛んでゆきたかった。私が行ったところで、何もできないとは知っていたが、惨状をこの眼で見、この足で確かめたかった。

カメラマンがカメラを掲げて現場へ飛び込むように、私も三陸海岸で俳句の一句でも詠みたかった。

三月が過ぎ、四月が過ぎ、やがて五月も過ぎ、

七月も終わる頃、私は新幹線で仙台へ向かった。早朝、岡山を発つと昼過ぎには仙台に着いた。仙台空港も浸かったと言うから、仙台の街は散々だろうと思つて降り立ったが、仙台の街は昔のまま整然と、すまし込んで見えるように見えた。東京の街よりも都会的にさえ見えた。

地下街のレストランに入ってみたが、誰一人、震災の話をしてはいなかった。

みずぼらしいのは私一人で、紳士淑女が上品に振舞っているかに見えた。

ウエイトレスも、美容整形を施したかのように美しく、都会的センスに溢れるばかりだった。

この都会的な街の中で目に付くのは、踊衣装を纏った人たちだった。

訊くと、東北人が自ら元気づくために、東北の五太祭を仙台で催したのだと言う。

青森のねぶた、秋田の竿燈、仙台の七夕、山形の花笠、さんさ踊を初めとした岩手の祭と、東北五

県の踊子が仙台へ寄つたらしい。

黒っぽい衣装は西馬音内盆踊の人たちかも知れない。

これ等、どこの県の踊子も、アーティストのような、俳優のような粋を見せてをり、とても、過酷な東北の農民とは思えない。

“あなたがたは、本当にお百姓さんなんですか”と、尋ねたくなる。

## 厚化粧して踊子の顔となる

東北の人は垢抜けているんだと、妙な感心しながら駅前へ出ると、何十台も並ぶタクシーが待っていた。

私は圧倒されて逃げ込むように、一台のタクシーに乗り込んだ。

後部座席へ座ると

「毎日、暑い日が続きますねえ」

運転手が明るい声で話かけてきた。

「津波に襲われた場所へ行きたいんですが」

「じゃあ、海の方へ行きましょうか」

「仙台湾？」

「そうですね。荒浜の方にしましょうか。」

ここ、駅周辺も襲われた場所なんですがねえ。

大変だったんですよ。

でも、海沿いは今も地獄のままです」

「三〇分くらい掛かるんでしょうね」

「いいえ。すぐですよ」

観光地へでも向かうように、運転手は嬉しそうに笑って見せた。

その笑顔が、私から言葉を奪ってしまった。

不謹慎な奴め、と思つた。

「ときどき、いらっしゃるんですよ。」

海岸を見に来られる人が。

昨日は、お医者さん、その前は大学の先生でしたか」

私は不機嫌なまま

「私は貧しい年金生活者ですが」

吐き捨てるように言った。

運転手は私の機嫌にはお構いなく

「仙台へは遠くから？」

「岡山ですよ」

「そうですね。岡山は山口と広島の間でしたかなあ」

「……………」

瀬戸大橋の……………」

「ああ、そうでしたか。神戸の」

「そりゃあ、別の橋ですよ」

運転手は照れたように笑いながら、急いで話題を変えた。

### 島若葉瀬戸内海も松島も

「海から遠く離れた、この辺りの表向きは補修さ

れてますが、よく見ると被害の痕が凄まじいでしょう」

言いながら運転手は眼を遠くに移すと、

「海の方には、何んにも無いでしょう」

言う通り、延々と続く更地が見えるばかりだ。

「もうすぐ海が見えますよ」

「まるで自衛隊の演習場のようだ」

「建物の基礎ごと流されたんですよ」

遠くに青い海の色が見える。

「ところどころ、白い石が見えるでしょう。」

かろうじて残った礎石の一部です」

青い海がはつきりと見えてきた。

タクシーは路の無い荒野を走っている。

「ここは繁華街だったんです。」

華やかな店が並び、住宅が並び、公共施設が建ち、広い道路が走っていたんです」

私は岡山の街や、倉敷の街を思い浮かべていた。

タクシーが海に近づくにつれ、太い松の幹が大

地に突きささり、集められた瓦礫の山が枯田の稲

架のように点在した。

仕分けされた、数え切れないバイクの山、冷蔵庫

の山と積み上げられ、荒野はどこまでも広がっていた。

「あそこに鉄柱が立っているでしょう。」

ガソリンスタンドの柱なんです、何故か、あれだけ残ったんですよ」

タクシーは流されてしまった防波堤のあった辺りまで来て、止まった。

「砂浜には、びっしりと松が並んでいたんですよ。

でも、ほとんどが流され、ところどころ残った松も、地に着くほど傾き、枯れていったんです」

私がタクシーから降りると、運転手も隣に並んで歩き始めた。

「道路もない、信号機もない、どこまでも瓦礫の山の続くなかを、昼も夜も遺体の捜索が続いたん

です」

「真つ暗な中を？」

「信号機が流されたから、車が混み合い、そりゃあ危険でした。」

警察も岩手県警とか、他県の応援がありましたし、ボランティア、外国の救助隊、そして自衛隊と、みなさん必死でした」

「……………」

私は言葉もなく、沖の白い波の帯を見ていた。「どさくさに乗じて窃盗団も紛れ込み、遺体の衣類、装飾品を奪ってゆくんですよ。」

指輪が抜けないので、指を切り落したりと、地獄でしたよ」

面白がっているかのように運転手が饒舌になつてゆくので、

「ちよつと海が見たい。」

一人にさせてもらおうよ」

私は波打ち際へと歩いた。

砂浜の砂も流されたのだろう。  
荒々しい土が剥き出しになった浜を、訳もなく歩いた。

### 呑まれけり浜屋顔の砂までも

タクシーの停まっている辺りへ黒い高級車が止まり、若いカップルが出てきた。

三月一日から半年近く経つと、被災地を観光がてら訪れる人も増えるのだろう。

当事者にとって、これからが正念場という時、第三者には過去となってゆくのだ。

私も似たようなものだが、広島や、アウシュビッツも、ツアアの観光コースの一部となってゆくように、東北の被災地もまた観光コースの一部に組み込まれてゆくのだろう。

「お客さまあん。場所変えませんか」  
運転手の声が風に乗って届いた。

一人で紺碧の海を見つめていると、何故か怖くなっていた頃だった。

一瞬のうちに起こる生と死。

海から眼が離せぬまま、自然の脅威を凝視していたに違いない。

「駅へ帰るよ」

車に着くと、運転手に告げた。

「ほんとうに、もういいんですか」

運転手は何か言いたそうな顔で、来た路の方へ車を向けた。

「三陸は無理だろうな」

私がぼそつと呟くと、

「石巻線、気仙沼線、大船渡線、皆不通ですよ。」

仙石線も高城駅までしか通じてないし」

運転手は露骨に不満を顔に出して言った。

「そうなんだ。」

バスしかない」

「タクシー乗り回してくださいよ」

「さつき言った通り、貧しい年金生活者なんだ。ところで、お宅の話しぶり、東北弁じゃないな」

「ええ。若い頃、東京に出て。」

六〇近くになって、こっちへ帰りましたから」

「ほう。仙台市内へ」

「いいえ。」

女川の方です」

「ずいぶん遠い所なんだ。」

通勤が大変でしょう」

「向こうには、仕事がありませんから」

「女川じゃ、駅が丸ごと流されたとか」

「はい」

「職場が仙台でよかった」

「はい」

「家族は？」

「女川です」

「じゃあ、遠くても通勤しなくちゃあ」

「・・・・・・・・・・」

「だったら、三月一日は大変だったでしょう。女川へ帰れたのは翌日の一二日？」

「・・・・・・・・・・」

「ごめん。さつきから立ち入った事聞いて。」

今日、異様だったのは、松の太い枝が、壊滅した街の大地に突き刺さった景色だった。

まるで、大地の底から人間の腕がにゅうつと伸びているようで。

天に向かって助けを求めているようで

仙台駅が見えてきた。

黄昏で、ネオンが冷たく灯り始めていた。

今夜は立石寺に近い、作並の宿を予約している。

### 地に刺さる一枝の先に松の芯

タクシーが駅前に止まった。

「仙台駅へ着きました」

運転手がホットした表情を見せた。

「津波の恐さ、確と見ることできました」

「お客さん」

運転手の表情が別人のように落ち着いて見え  
た。

「いい運転手さんでよかった」

「実は、一二日に女川へ帰ってみると、駅も、家も、  
家族も、みんな流されていたんです。

未だ遺体に対面できていないんです」

「そんな。そんな馬鹿な」

「会社の寮が私の唯一、帰る場所なんです」

「お宅は明るいし、愉快だし、とても信じられな  
い」

「人は誰でも、震災に遭ってない西の人だって、  
人前では決して見せることのない、哀しみを持っ  
ているでしょう。

東北の私等は同じ時間に、一斉に不幸と出遭っ  
た。

その分、孤独じゃないかも。

多分、亡くなった家族も孤独じゃないかも」

「・・・・・・・・」

「これからです。

みんなの心が、この悲劇から離れてゆくとき、と  
もに不幸を背負った仲間も、ばらばらになってゆ  
くとき、私だけの苦悩が始まってゆくでしょう」

「・・・・・・・・」

「仙台の駅は悲しみの坩堝です。

悲しみに呑み込まれまいとして、みんな明るく颯  
爽としているんでしょう」

「ごめん。浅はか過ぎて、ごめん」

「今夜の宿は作並でしたか？」

山形へ行く、仙山線に乗ってください」

「ありがとう。ありがとう」

私は、たちまち雑踏に吞まれていった。

(完)

## 私の好きな一句

信里由美子

### 三日月を月牙といへる国に見し

粟津松彩子

私がこの句に出会ったのはまだ俳句を始めてい  
ない頃だったが、既に俳句にご縁を頂いていた母  
が昭和五十九年八月、稲畑汀子先生を団長とする  
『ホトトギス中国・シルクロードの旅』に参加さ  
せて頂いていた。

上海より始まった旅は西安、蘭州を経てゴビ灘に  
入り、酒泉、敦煌そして万里の長城の果ての陽関  
迄黄土高原の黄砂の中を行く旅であった。

この旅はビデオに編纂され、我家の居間で観賞さ  
せて頂くこととなった。

その折この句に出逢ったのである。

この句を聴いた時、たった十七文字の世界であ

るのにも関わらず千の言葉万の言葉の感動を言い  
得ていると思ひ、俳句の持つ深い世界を垣間見た  
思いがした。

作者の粟津松彩子先生は後にこの句を授かった  
時のことを「砂漠の町敦煌に一泊したが、その夜  
の星月夜と三日月の美しさは、生涯懐から消える  
ことは無いであろう。」といわれている。

中国語で月牙(ユエヤ)という三日月を思う時、  
同時に私の臉にはゴビ灘に忽然と現れた月牙の形  
をした美しい泉、月牙泉も浮んで来る。

砂漠の鎮もりは太古のしづけき。

天に月牙、地に月牙泉。風とともに砂の大地が動  
く。

その砂の大地の真つ只中に三千年間枯れることな  
き水の世界を湛えて、天の月牙も蒼く地上の月牙  
も蒼い。

俳句とは限られた言葉から、或いは一つの言葉  
から奥深い世界を伝えてくれるものである。

俳句を異国の人に伝える時、何と言えばよいのだろうか。

日本語でなければ五七五にはなり得ず、単に詩であるとは言いがたい。

ワーズワースやバイロンやキーツも詩を紡ぐが俳句ではない。

しかしドイツ語であってもギュンター・クリンゲ氏のように、その詩を見事な俳句にしておられる方もいる。

写生による一つのシンプルな言葉が扉となって、その奥の世界を表現できたら・・・と願うがまだまだ先の愉しみに取っておこうと思う。

最後にこのシルクロードの旅の、今は亡き母の句をここに記して供養したいと思います。

ゴビ灘の真只中に秋耕す 智子



### 「倉敷」

石井宏幸

倉敷川夜蝉鳴きつぐ夏柳

水原秋櫻子

何時、どのようにして秋桜子が倉敷川を、それも夜の河畔を歩いたのかは知らない。倉敷川と上に置くことにより一番倉敷らしい情景を想像させ、その情景の象徴の柳を下五に置くことにより焦点の絞り込みを行っている。また中七の「鳴きつぐ」は、闇の中での時間の経過とともに、鳴き代わる多くの柳を思わせて空間に繋がりをもたらししている。何より柳の前に故意に置いてある「夏」が蒸し暑い無風の夜やだらりと垂れた柳のまどう夜陰を思わせ、秋桜子の鬱屈を色濃く反映しているのではないか。

白壁をすばやく過ぎし秋弱日

岸田稚魚

倉敷のもう一つの象徴である白壁。薄雲の拡がる空をうすうすと日輪が渡る。雲の切れ間から一瞬日が射して、白壁も、葦も、倉敷川の水面も少しの間明るさを増したが、それも弱々しいものですぐに日陰ってしまった。弱日の「弱」という文字、「すばやく過ぎし」と秋日に意志のあるごとき語法が、曇天に立つ作者の焦燥や屈折を感じさせる。白壁はその屈折を映し出すスクリーンとして冒頭に置かれている。

私も白壁を用いて倉敷を詠ったことがある。

路地に入るより白壁の余寒あり

白壁の誰もぬぬことにある寒さ

石井宏幸

白には鏡のごとき冷たさがある。

◆「俳句っていいですよね。自分では作らないけど、ホトトギスとか借りて読むんですよ。」「じゃあ、これも読んでみて。」とアンソロジーを渡したのは、退職して四国を去る少し前の事でした。

◆そんな彼女から届いた手紙には、「仕事帰りや休みの日にお年寄りのお宅を訪問してパワーを頂いていきます。冊子は私の訪問時の持ち物の一つになりました。話の種にさせていただきます。ただいて申し訳なく思いつつ、有難う、また次見せてねと言ってもらえますので、調子に乗って持ち歩いています。私の行動をお詫びすると共に、たくさんの方が阿南で今回の合歓を心待ちにしていることをお話したいと思っていました。感想を送ら

せていただこうと思いつながら、自分が味わった感動を表す言葉が見つからず、せめて感謝と、合歓の会の作品を待ちかねているということだけを、お伝えさせていただくことにします。」

と書かれてありました。

◆うれしかったです。

アンソロジーがこのように使われるなんて、思ってもみませんでした。

◆四国阿南での勤務は予定通り、二ヶ月で終了しました。

四国での収穫は、念願の室戸への小旅行と、新たな出会いと、そして何よりもこの一通の手紙です。ありがとうございます。

◆そして皆様、次号もよろしくお願ひ致します。

浦の字の続く地名や冬の旅 (牛二)

## アンソロジー合歓 Vol.9

平成 24 年 8 月 1 日 発行

発行 合歓の会

発行責任者 富阪宏己

印刷 弘文社

岡山県津山市

連絡先

〒 701-0304

岡山県都窪郡早島町早島 3991-144

富阪宏己方

次号締め切り

平成 24 年 11 月 30 日

原稿送付先

〒 708-0015

岡山県津山市神戸 719-7

渡辺牛二

Email : info@nemunokai.net

Tel. : 090-8710-7067